

殖について」

(註2) 北海道さけ・ます孵化場発行
「Salmon」1956年版

(註3) 本誌, 第10巻, 第3号, 米沢技
官「米国・カナダのサケ・マス資源保
護事業」

《後記》

本稿は現在検討中の8億計画の概観を

試みたものである。紙数の関係で現状の
問題点についても充分には書き得ていな
いし、検討中であるために具体的な計画
にふれることはできなかつたが、一つの
時点として大方に知っていただくことが
必要と考え、敢て筆をとった次第であ
る。不充分的の憾については諸賢のご寛容
を乞いたい。

編 集 後 記

○今年の事業も盛期を過ぎた感があるが、現在のところ昭和31年度の回帰とはいいながら、鱒も鮭も全道的に大不漁で、十勝管内が割に漁があつた事と、網走が尻上りに上昇してきたことで漸く31年度の18万尾を越え、25万尾程度にとどまりそうだ。

○先号に8億粒計画の農林大臣陳情を紹介し本号でその内容の詳細を説明しているが、今年のような状態に直面してみればこの計画も相当慎重にやらなければ計画倒れの心配もあり、この点では後日支場長会議がもたれて検討されることにもなっており、注目的となっている。

○今年北洋漁業の実態を取材するため、母船に

乗り込み貴重な体験をしてこられた大滝氏から「鮭も鱒も無限でない」が寄せられたが、無限でない鮭や鱒を追って日本の漁民ばかりでない全国民が目の色を変えている状況がよく読み取られ、面白い一文であるが、これを読んで、われわれも一尾でも多く資源を増さなくてはと意欲が湧いてくる。

○おくれを取り戻そうと大馬力をかけているが、原稿が不足して閉口している。これを機会に皆さまの投稿を期待してやみませんが、それと同時に写真もお寄せ下さるようお待ちしております。

「魚と卵」編集委員会

農林事務官 秋庭鉄之 技術吏員 大東信一
農林事務官 佐々木正夫 技術吏員 大屋善延

札幌市外中の島(TEL ④ 211)

発行 北海道さけ・ますふ化場 場長 荒井定治
北海道立水産孵化場

印刷

中西写真製版印刷株式会社